坤
特別
ハ5
1889

門べら
1889

京都帝国大学図書

西翁道之記

昭和十年度寄贈

まことにつくる東の日記の南
弥生とともよはひくる獨錢
芋鞦もあまりやいとあはれ花咲て
時は寛文四年弥生の始拾到
鞍馬のふもとを門出せし日思ひ
ものいひくる
ゆくすゑよ今ゆりうん家橋
鞍くくるはせくめて
ひさこうる土らをも東えん花盛
京は四方のとくとくうて殘も
尋ねありてして
袁裏を成とかくもの錦水

[illegible]
色せんを地とせの横ふきふなし
[illegible]の人
堂々は子寿のちらひ花えず
今日八十日日暑[illegible]むらひて
夕まへ[illegible]の園つし
四文は[illegible]
四の辻もつく[illegible]大路の
おなの[illegible]もつ[illegible]旅まと
なる中[illegible]都人と[illegible]
會坂の関かて形や毛見人
野田の橋
日御さへ西る[illegible]野田の橋
茅津
弥生也まの茅津の姥の俤

[illegible]
[illegible]
[illegible]
坂下橋[illegible]
[illegible]
[illegible]
四日市[illegible]
四日市[illegible]
海上悠[illegible]旅の[illegible]
帰る波詠め[illegible]行野の[illegible]
明海
詠をよ[illegible]月よなる[illegible]
八橋
鄙のことこはの沢のりをつ[illegible]
[illegible]

の[illegible]詞あり江の母子ども
さくさんをとゝ試演す川の名
小松の中山
花いかなる小夜の中山花の盛
宇津のやまゝ
れいみし詞歌ばかりやはちかく
長谷寺は奈良
はるの[illegible]乃為こと世の長
日暮川西あて
河の名の沈や古くゝ子
志いりゝ山
山はゝれゝ川橋等や樓閣
江鹿をゝ
江鹿をゝ遠風をやし雲の弱

清元三種の浦勝月のあけぼ
の詞後ゝ富士の山のいゝ景
ゝ構まいりてもいまゝ
右二の段をゝしとなるし春景
富士の雪三里裾野や雲の京
箱根峠まゝ桜をゝ
山ゝみ花ゝ俺てやおとにゝ
川ゝ見る雪を樓ゝ景
共まゝし景もかすむ船ゝ
家ゝまて
たゝゝ花まはゝ花原のやゝ哉
見ゝゝ川ゝ鎌倉面ゝ
むし今は代の廣さをゝ
ゝ海原江戸海道ゝ
[illegible]道中

[illegible]よのなかや月のすみこし川
秋ぶかい京の森を立ぬ名
昔えんぎふの道乃秋の色
みなの河ぶをつのうて秋のうち
秋々月の名をやゆるる橋川
名やうつる藤の浦乃月の秋
あ戸ぶの門村山と以不京色
月新のむら松迫しうの秋
久ぶの寒景より岩城ぶ
沖まをれ波い名をの開の月
はをの山ゆ月
尋ぬ山をのうるゆみちぶ
清無ぶ
さそれぶやるる岩城の子世の秋

肥田の玉河
玉河や形風白を雪ぶまうな
結絶の橋
玉ぬ平結絶の橋うを乾の高
小河橋
形ぶ城波を小川の橋もなし
松ぶ道中西此の外
をれ孫ぶ時よりも岩根山
神後
ぶをうぶ形神の[illegible]
名九河　仙臺ぶ
埋木や名ぶるよ名取川
千賀塩竈
[illegible]色ぶる雪のうを煙

[illegible]の夕ぜ　秋のゆふべ
[illegible]の嶋や　道の[illegible]山の[illegible]もなし
[illegible]や[illegible]　[illegible]てゆつる　笆の[illegible]
月よかせをゆの延ちの　袖枕
[illegible]城[illegible]を　都の[illegible]山[illegible]　[illegible]もなし

[illegible]

[illegible]の秋の[illegible]も[illegible]やちの[illegible]山

[illegible]岩[illegible]道中

[illegible]も[illegible]よ　會隈川のあちの[illegible]
[illegible]の[illegible]秋風の[illegible]
[illegible]　[illegible]
秋風や云の[illegible]のこん　杵[illegible]
下[illegible]の内
風や[illegible]の[illegible]

宗因獨吟俳諧

五百句中三句

[illegible]　[illegible]
[illegible]さんちよかりをさかもよし　花の[illegible]
いさやちのとちよまこかりを　枕
あすはをふとみ[illegible]　[illegible]
さらさらにはつふんさし
[illegible]なる　[illegible]
[illegible]　[illegible]
月[illegible]の味噌汁の味[illegible]
[illegible]氣も　[illegible]　[illegible]風
物[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
三味線を[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]

嗤なんぞをいふてやらなる哭まて
手まくらへ膝におかれあつかしや
うぶ毛の網おりかぬる雉の子
通ひ路にあふかや野木の猿
恨み餝り恚葛か原をさてさる
黄昏時のうとましな人
秋稲ハ捨芙かりふらめしや
曙層にちらと掛りけの月
立寄りて保尾の足せにおとしみ
気り年てゐる大佛の前
大和なる奈良酒盛のおひさし
情新身のかくなをそや家
思ひ語を云ひけまれとかあらん
荒角枝這ひまさ盗人気

独居ハ妻戸のあるもさみしきて
そよしく風もそよとうらふそて
玉箒の恋の侍宮も守まほし
栗ころしとはかりあて給
古瓶よりもちされる人なかし
狸庫入銭たつるつめてし他
月すしもくられうもる枕下
露ありとぬれ衣なきて
うはらく蕾松魚と鳴ちくら
ぶつまて草の根もされぬ中
瘡頭の紀なくしくる我とひ
乳の子かうかてさされ来けり
悋気せし短遍のむり悔かりし
拙をかためて方数さ事

白藤もちらひ乱れる牧〳〵
なりをたつる有色のたてく
名物をしとも〳〵綱力舟橋
枝も長ふも〳〵ちらる勝云
相生の松もたゝきまぬかれて
新枕の夜とゝ見し墨の物
等横もまつる小袖二重
かゝるゝ胸の烟とゝ見
繁しら住開き向い花も枯
ちかく〳〵るゝ勝なる月
まゝ残もはんの脇の
住吉もて世尾れかゝれて世尾れ
ゆしあまり無一筆うくとり
重みるもかのとまるせう

ゝ雪しも反の意詠み供をも
傾城所詠あらず ちらく〳〵
西洞院殿〳〵すゝ有泪川
義ら桂の名ちらくれ中
折〳〵道ふ桂を彩河ふを
あひ月ん月を長月時分
子住〳〵紅葉の白雲ちらし
君紅さ〳〵〳〵吟上力演
秋〳〵すゝ〳〵月ちらしや
二反ひ〳〵ちらあの笠の角
子紅とあて言紫ふい人名
あ〳〵ちやらむ〳〵むく〳〵の友
別紙よやれ焼たよあんちよ
形身なるゝと抑つる服さし

りてなの九うらうせいあらられて
ちひさきの月ゆ大小
冷しやまあひさけの水鏡
はるゑの縄かゆ雪ゆ泪の
袁女持垣のごとく裏ゆて
海をちひさきて舟もかくれ
諸ともに枕もあけぬ二日酔
鬱しい初しつ眠をしめる
元ぬるは三國一の花聟は
鹿立名のいるよ　こる札
哀しや賢さ立つ陽うん
志ゆも沖奪をうつ笑好
秋るふ立ひるふるるも寝れ去
氣のけしくやなりあく氣

先生の山伏もうな恋の道
大業ゆも　海を　石車
昌ゆも筋ゆもうの金次郎
おゆれなうちの酒ゆうん
月祝ゆ月祝ゆ酒ゆあて
ゆゆも酒ゆて　ゆを夜
ちりゆうなを紅の枝ゆ
乃ゆもゆ　ゆ祝　ゆうつ
玉ゆを宮家やゆも寺送ゆ
人伏祝ゆ陣の内産安
釜魚ゆ祝ゆも祝ゆ伽羅を焼
れゆい藤記の　ゆて　の
鈴そちゆうゆせいゆよ
書ゆうとゆう祝拾　ゆや

情ある人の集り中ノ座ノ座
さゝてしの人のおもふ毎
ゆゑ此の盛りも花の名ばかりの
世人や奇特なりとも是を

五百句・角三郎

第壱ふ五百機嶋や伊勢神宗
伊蒙濯川ノ波の音声
友子ちりやみせくハ夕ぶて
子し除しの未れ長砂地
此不相遠あるさる松ノ風
相ことあるやいと山の端の月
一枠既ありて叶ふ丁ノ月
祝ひふ以第ノ花咲

婦姑そ其ノ初ノ年
延寿元年意の山く
仇名立ノ怪ノ徒ノ家ノ
名後一ノ名あれ名ノ名ノ
町内の世ノ紅の林さま
一名間中ノ秋の夕雲
四後くと時ノ雨ノ雨ノ
ノ川ノ世ノ上ノ月の下ノ
あれまてらて安ノ河毎
前ノ名ノ名ノ紅ノ高ノ
結ノ世云ノ世ノ出ノ世
何ノ名ノ川ノ江ノ借店
花ノ後ノ清ノ清ノ池
聖遊の宮中是表の風

とこまても心ゆるりと花小蝶
太刀抜合うて菖か現の
別しく出つて上手拍子あ
むつらしく清うて勝を取りける
夕食の物もて好夜ハもし
末一服ハナなれる山の音
ころころしなりけり都の花落
ともに則ち我の世の中
今ハた運まかせて月の影
下向して日かれやし
又太郎又次郎知らんか
れつや同し間尾城うれん
縁道ハ太法華津の首也
いかにはやれ今の道が済

君かあるさまもあるを町
見るてあらん宗物か語
此太線や三日日中の夜の空
欽世荘いて雨を済ます
あるかくハ大慈大悲の新たらん
見とる覚悟の道の辺の松
西方へ入日わたま一里塚
松の餘りを加へ茶渋世
身ありて山うて可瓢箪や
酒を五合て多く秋風
杖借錫ひ名を月下門
いかなる用の桁も笠
花はりて桜も本ほも拝子も
雲隠そうね者あらそうの

さし荷ふ田子の浦こそや霞らん
打出て見れハ淡路色こ
淋しき秋の華たちて二三行
借家かり端午　蝴か般
道あり御殿あれとて月待たる
ここら白ある廟頭中を押分
詞論をなし離れ無くて
舟と陸とを荒磯の波
安くの壺の内より魚を持
都の三条を出し　の　情
粟田口ね又かしこ　伏見道
一足ちりつゝ大道ありき
乱拍子好一もえられ嫉妬ん
櫓数をやめてく　渡る旅人

屏風に面影向ひきやうえたる紀
こゝ明女房かゝとさまられ
急きて子寅髪まで数取ける
名しし一所に寄せて覚えての
本朝下に落花粧箔二日酔
まり川急き洛陽まて湯の泉
夕霞　扨浮名の詞きよきを
ひらきせられまて是らを抱山ての
ちらくと落栗落椎萩の露
あやてるまでもなし　様の園
さりとてハ原なは序しもはよし
余亦へ如何ね　な
扨年ハ究字調成り七十の
古来まれなる草花まてそ

ちらしと見て柄箱打ちて
はとやまうん小袋の紙
神々世をも宮ゐたき第二之外
糊付けもしいもはいりたん
山又山やまめとして山の等
もなく生ふ小男鹿の声
聞いての神風秋風ねを寒
ちいく吟味れ月とさやかな
清き月の月うの面を晴て
蒼海万里雲の中
宗門の悪風次第を改め
肺毒散をも記備力
庭宝の薬を薬種屋のこと
清華山集　松風カ声

笑ふ乃花ハ咎くゆくを
吐月乃うし　三月　二日
笑も居眠をして あくひして
日徐の経の毒を消ける
磨まも経まよし万はし
志川梵天中まし志の栄
然一年中の変わりは
志乃れい幸伝めてなるく

五百ゐ〜中二ゑ

摺粉もふまふまりを庵乃し
田楽串乃竹の下雪
小刀の白をとてあ月夜て
硯箱まも吟きうしに

芝生の花なれやハ是なるらん
酒も似合ふ門の賑しさ
立てハあのあけしき山嵐
尾上の桜落ち果てせり
永き日も傘さしける鐘の声
かくてかすむ小志めらん
過ぎ来る二月二日の朝あけ
須弥山を越えも落ちすそて見れば
眺めやりつゝて南無阿弥こそ
志んおもふ太鼓の声かも恋
二十年ハ音楽なり成一躍
やちくさし 枝は朽ちたり
童子おもて学より習の初嵐
丹波丹後の山か端の月

見えつゝせハ大代表の気晴て
ハ九万石積るしら雲
落花もみな子孫目も惜しくし
羽単都に書かれあの
引て入芳野の野や霞けん
書棚の出すを顔へ太石
荒天狗まとりよそ眺めの気
たのもし誰ま見えそ何ゆ
行勢気配見よう切かへて
過一日とゝ 赤林なゝ下陰
切妻も涼み流して秋のさう
こされしくの茶屋もあり
賣物もやさ云紫香やなむにくゝ
室町通り振まわり神

[illegible]衣の庇は袖うち[illegible]
袖とうしく[illegible]西は[illegible]
出り[illegible]る月は車の輪のごと
周果[illegible]花[illegible]
[illegible]去来神代[illegible]秋の色
し文字は[illegible]小男鹿の[illegible]
山里は[illegible]は九の門[illegible]
むし[illegible]ふ[illegible]の[illegible]
干飯を賜の[illegible]
[illegible]て[illegible]袋[illegible]
[illegible]草[illegible]
[illegible]は[illegible]む[illegible]の浦[illegible]
傾城は接[illegible]
[illegible]られ[illegible]の[illegible]

汗勤の世は自[illegible]
[illegible]の[illegible]野[illegible]の[illegible]
利刀の床[illegible]
四[illegible]やみ[illegible]惜[illegible]
短冊の裏[illegible]
[illegible]の[illegible]
夕[illegible]の[illegible]
[illegible]て掲上[illegible]
何や[illegible]
[illegible]の[illegible]
俄[illegible]山[illegible]
近[illegible]人里[illegible]
会佛[illegible]の[illegible]
十万億土[illegible]

世の中ハ一是非に妙妹
恵いとふるに東雲ハ蓬けり
月影を見落してや莚らん
葉守の事とも草の露も分け
宵しづか嵐の引し秋の夜
焼んはもや色ある玉の露
物とは目撰かあらいいらせん
六十路けれ世山の雲
軍せは堅年か　夕風
河内おちての里の端登
小道人読田ぬりや宿あらん
木の葉ふ詠れて待大数そ
秋風の吹くも哀し所なり
野飛は刈　米家か有

年に曰雨ふるんくと秋ハ定て
使ひもかりて吉虫の声
洞菜ハ何の風情も嵐山
降ふ家無き　秋か下露
世拵人業の浮名や詠むらん
業と云字ひ　横ある家
他なりと三不段のえぬしに
名にこそ立れ入日紀より
流れし難く築にありけて
手代まらも　かの人のれ　来
刻れ不の薹ら新踊の月もこ
古稀家ひ　読む　式　秋
清荻の蓑信ある蓑　鑑
婦落花しや　構ると唱らん

漂泊のあはれをもよほすたよりにもなるべきなり
初春にはさるべき人々の男まうでの
八幡たかの山たちまちに
村雲をはらひ三年の山ちんぜん
郭中皆白雪
言紀貫之四方の方も
英人乃沙めるひとまち
高砂の遠菜の春の風
元日の夜の夢乃
雪もまぬはれるやうなん
門徒方の雲まちなる

何号

月代や鮫ふる文字の水石浮
武人乃日 初春の
春くいあもせまなる秋なる
多ふあるまるい岩の松風
試色ふ宿元たまへ夕時雨
判官武蔵を食時をし
俎板を切て引家移事
おもをあ数代の昔 流
猫まるの京亡昊とあらんて
安牝像を 奥ふの 昔
むし男ふ歯草やおうん
まりしあを口情ふ身心
雑ふの時ふ如ふ
江戸思新色ふの新ふ

右斗ハ通ひも手形の一節平
お他茶次上　数人
辻堂に寄せる清理料お遣せん
八卦の中間を分けはく
其所にハ住居れ　秋の風
さらを京流の見る月も月
酒者あまりと云んとの花の下
あさまに遠くふきみ　名くれ
流れふ学ひて略る色の色
勧学院のおん名　ほん経
菩提ととたまふしてに読し
一念発起終わん　もあり
くらみあふ向ひて名家のふやう
是も人目の関　服　三虫

弓と絃何れならひもとなきまも
手くるを引て数許の袖
比丘子申まれとや　給の花か
絹みえ美見ゆる　白露
ときもとうけ流れを底の舟
河原院に光源　秋風
大僧の関東をも実しれ
事定是ハお物入なれ
乙姫ハ英月なるらんと名あるて
かくれまいて上留まれまんそ
かけねなし左さらも此うなるふ
来る月一別　縁も比度ねぬ
比丸ハ門　花に清　香月に歌
梅香お経をを色糸の上

鞠はまりなどもてあそびぬ又
吳山九山八仙切車
前にはかりたること不堪詩ん
いよこの繁情をひやせ[illegible]たん
新田の恩波をこそ[illegible]
不幸短命身の下まも
中指の一日の夕月雲
宗盤の書の粉おし
石臼も[illegible]
[illegible]
此の事[illegible]
[illegible]森の下
[illegible]
[illegible]の[illegible]を杉[illegible]
[illegible]の[illegible]

好みの[illegible]
白ふ[illegible]れ[illegible]月新
を[illegible]
[illegible]
唐瘡の名[illegible]
編笠[illegible]
人[illegible]小[illegible]
大[illegible]道 杉[illegible]
[illegible]
脚病[illegible]
[illegible]
泥[illegible]
蠟[illegible]
[illegible]

秋の田の小町か一通りみよ
あたりの玉章つたへの年貢
七夕に木綿一端ほしいなれ
月に村さめ日照り大風
ことなれは切ましさためらる
町役法会修道場の太鼓
襖し或は弱きより まて
須らくもと自ら相応なる宿
とんの前ら箕笠も出 木履
たまくもゑのまもむかしのわか跡
家外をとも如何営学吊ひ子
欲とりふりの武芸野の末
世の中は多くとらの態と見
院にあやゝくみへしせゝなれ

略書おまける示はあゆるなり
とりと笑みくる夜の内積穂
忠まても余りけなる吐し
百合の小節又九郎か事を
なくの生浦の浦学履見
知りは余示の走りか 三分
敵討られし別をみてあれは
みり三ッの手札名あると
おもてもれら縁ら息昇も出
その姫の相も意 くも
はくさんを法華経へより候
是仏果社あとをあふ由来
おろ五の太和尚まて本中たる
まひらつれの玉天下泰平

皆ナ世俗の男子花さうり
赤刀形ばかりさしそへ長風

肥前の城下より四人の他方の名高
仙洞御所にてこれくらべ競べ出
歴代の真地を明けるをえて石
亀も亀あるふるもちろんとも
めでたきひのし
義経三十六人の色 家 千年
帰京波のなかの人情 帝
類毎に接合拍子 を
皆花の明 れの
月新も殿の はえ
今年にて 海 ア
請状は一通 吹 海 風
後日の為に 晴 ふ

立寄もおほくてをれをとれば
姫をつくるなる 旅 人
うるはしあも 所 ける 見 扇
こしはくこそうり 神 移 吉
別くに 巻 奥 ゆ
風 上 も 経 庵 月
深 ともあ 落 年
色 ふ 松 下 陰
去方の 出 代 待 り
姫 廿 日 の 庵 の 長 風
多 く 不 嵐 の 子 を 明 る
国 去 豊 さ れ 米 粒
君 代 い 久 つ ぶ 芋 の 形
菓 折 越 月 峯 松 の 形

琴の音よ美屋仙も寝ぬとて
大井の宿れ柳しの門哉
物中も今いい浮世ふ浮世ふの無
智者方をもきりん時
傾城の時風も月と共るて
きりぎり屋敷や焼る物ん
旅節角も荒す陸の夕雪屋
狂籠者の西ふ東 行
雪持のうし れ本位を足流て
屋乃上なふ山ふ雲
むり思ふ美の屋の袈裟衣
海非時とも呼人もなし
一紙を持ても見ん花の陰
仏法寺よ月を出ふ

我去路の乃ふ人の許よ国
ふり高仙誕伝ふりをて送り
けるよ乃詞よ花ばせり
あるもの詞の花ばせり
ここのうちふ西羽常ナ
しいふ六十余りて詞の出をけん
俳句ふ西白き
あなたふ又ふるにて人
の袴ふ基ふ早下
てかをも俳句を誕
ぬ九ふ俳句ふ誕よ深
誕句ふ六十余列ふ
見しうう
ふもの
ふ指ふの
の綿乃袴ふ
ふたのはふ
且ふ玉ふ
立ふ伝の
ふ人

雪ぞ降りのやうなる意の文字を
仏名立後蓮の
類和の帳柱うるれうれいま見て
初めりし面のしぬれの京
月新世口説さ所て入ぬん
ふりうるうるうるして降る厂ね
寄り帳の一ふうり吹 秋の風
降りのうるのみのうる初 病
ぬさなさ紙蓮えうとおゆて
蓮外ぬうるるるるるるるる 旅人
うりんめの目もとの塩い色い初
蓮つつうるうり ちひうるうり
枕のや蛙の身とおうるん
仏も蓮めうる 短夜の月

生茶呑ぬさしか置て
須未しけふ初ら下陰
ふ蓮の出面と蓮も偽ふり
書ふうるけるく鼻紙のうる
穴蓮蓮のうるとる忘却て
云名付ふりさるれ米粒
蓮ら初やくしうるぶきねの初
毛枕うも 蓮るの 初風
琴うの蓮ふ独寝蓮とかりめせ
大井ふうる又 いうは寝らるう
人ぬもいふい蓮世のさうるけふ
こうふ蓮ぬうも 蓮 なく
ふ蓮うの夜這も月も更て
拍く尾蓮ふ二蓮ひうりする

旅籠屋も並ての家に話ハ人遠
信者の為に吾妻路
胸の烟は二ハひさしとさ流して
肩のよするる田子の浦には
むかしさへ下女が漂の音すな
拝み信心をとく呼人もなし
一筆も拝てもさん乞れの法
そかし頌作よ身ハ大果なり

実や秘蜜の法を汲ん者ハなを手に新
のことくなりぬけんなの祖師の指言
いと難き落ともなく 幻子新向也
をうらぬ信ちらく

摘人の新まうさるゝや 仏の嘆
月をいふらく 去秋聖極也
夕暮拈川されは志ゆ菊て
小鹿とうめの中寒る哉里
称ちらんふもとん志あ東志志
まてとま契弘鶴ら道てれ
契ての為の手傳はなかうらん
人まくかれの二義 一ヶ詩
縦語らるハ寒ひなりまかさせ
庵の砥あ付 清風て 立
法性の室を内丹難をそり

碧の松と白い櫃境
墨ちらす禅堂の朝の月
なんち哉 秋ふる野狐
形ちらす花の雪もちらす
世ちらす水際の秋
月ハ照ちらす銀花茂
ちゆる天井の里ハ雲屋
旅衣 まめ 修田立ち
ちしろ磐引 ちめ
鉢中の秋ちゆる
香炉ハ菩提 肌ちゆる
南無阿弥陀ひていく貴し
ちゆる寺の再興
訳の為 世ぬる 秋而平

討死ち名しるし軍陣
物の具のふる茅原を踏
まと己の時と月ハ
鎧兜や亜 唐弓の書代ハ
袖のすちる通 秋風
柳ちる陰の撲鞠とめ
ものとおちる夜ハ是也
なをこいよ桃灯とも夜ほちる
淀のあちらの舟をあり堀
まるちる立 腐くる花ちを
霜敬ち立ちる果報 ち

旅行金三吟

二人してくるといつくるとも遠山
江戸より奈良又こゝより奈良

うれ沿ん西馬ら方ま坂清水　柳翁
きみ如てやん一夜酒　仙素
月の宿亭主い　ねまるなれて　遠山
硯を筆と墨ら　白　雪　柳
秋風を掃ひうわら　茅箱　素
笠ま本の葉ま　紅　山
山笠ふかるま　入日　影　柳
きせるかまい　蒙の浮雲　素
墨の色いあら　一ッのまま　山
やよかるる　誘ふ小仮　柳
雨ふけ芝居の服ふたまて　素

中為動まて　袖ま下風　山
仮剃の夜ら　の霧肌も　柳
接接ぬ　中の　木枕　素
首の骨痛ら　付　柳　山
ふらやと引　今　鶏の別　柳
為一ッ　ふ　屋　素
小ふ車の　きき　虫の　山
金時ふ　秋　ん　柳
月もい　怨　蔦の下陰　素
法の花寺い　柱　柳　山
柳いみより　札　ふ　柳
岩ふ宿いと　川　柱　素
一ふの子縄　よ　ま　山
谷川や多ん　節の　ん　柳

さしも萱草ふるまでもみ色　素
植ゑ早苗渕五六はいやはや　山
ひろ〳〵ちらし〳〵と行る里人　柳
やあいなよ早下よ及ぶあ宵の宗　素
手前い高ふ高ふ葉を色を有　山
進退い実俺て秋行色ふ　柳
清出て中ま好いろふ　素
枝ものの色の山行る態かんん　山
立俺てやいなん吉野とやえん　柳
まの年花い浮もの世の行　素
大師以来の月々あむ屋　山
法身弘い柳も古家な意の内　柳
一枝ゆてされて　櫻張　素
漕舟の座形の前の汐風よ　山

西国三九の女浮　千鳥　柳
大坂を人うは立越る夜の波　素
奥義の数のの好一ふ　山
上ものふるとみの快えて　柳
人〳〵中奥の名　素
冬色い屋あるのの　山
ふるもたやまく意月の新　柳
秋風よ承ふ雲時く　素
歌崇も　山
多ふう服ふ　素
拾ものやふ長ふし　柳
世ふをわるをせふ高　山
意をのいの弱ふ　素
夜根いちんふんの振り色　柳

他名は高とふ九山の麓
ゆかしき松を時雨と待ちたい　素山
遠慮なけ烏帽子なりけり　柳
蕨いろ〳〵なりを摘む折柴　山
供奴なき紀小廷の雪　素
客呼とるも花の月の巻　柳
知恵の巻云仏不くの車　山
陸奥を独り行ふ旅の人　素
又よ相模三日山あり　柳
又同じく山下宿を帰る庵　山
時しも陸子迎ひ小田原　素
今参り昔一戦砂ぶて上を下　柳
橋を引き合のうちと　山
親さけてつゝと流む泪川　素

ゆくを見て仏　柳
さ降い相も久しや年寄や　山
帰る有りの行方もなし　素
篠原の住ちとめて意消て　柳
華ちさんまの栗なん　山
秋やもるもあるのいて猫の色　素
雲滴りて蓑　清し　柳
あれい彼清水山西の月　山
此寄朝夕ふ秋あれ　素
ふる〳〵郭ふるむのふよの　柳
いや〳〵三重寄ふ寄　山
節の宿もやめさなる秋の咲　素
祝ひいさて毛格元伊り　柳
異見稚中子一男初ふ　山

頸を枕に病む幽霊　喜

のさまよふ十万石遠くなれ　梅

月かけの前に続く村里　山

なかき鐘ニ深山の姿川の流　喜

峯から落葉も打行のえ　梅

え鐘をよう〳〵ぬれ霧時雨　山

お側去らぬ秋の草刈り　喜

年の経傾く月ハ合点か　梅

枕紙さらす嵐から使　山

立別れ語ハ比翼の為目見え　喜

蛸も知る同穴の中　梅

讀きても思ひ入らしはし　山

一首ハ切りを古への定　梅

道行の語なく帰りし　喜

借物らし加賀笠ハやゝねの　山

花ニ目ハ花ねとて中草履なれ　梅

酔ふてハくる紙枕も染けし　喜

三人の笑の声も寝夜ニ　山

目出度やらて出る　借服　梅

去年冬つゐる茶羅町の亭ニて山崎
呼一声名ミなも似つても三百余なき
立つゐる弾音ニわもれいつもなんとも
ならん人皆かしまし我独なとし唯
ある翁一句印負して帰り来りた
ミは油屋の樋なおもろくさて
祈しれぬおもてなくさねのくら
ことの葉廣めしてもこ云集つて
ほつくりつふあつまもほつれ

茶羅庵も名なし哭　郭公

右獨吟十百韻ゟのもの之宣ニ略